83

『百科全書医学篇』（明治7年文部省刊）とChambersの原本（1857年）について

樋口　輝雄
日本歯科大学新潟生命歯学部 医の博物館

イギリス・スコットランドのChambers兄弟は，エジンバラに出版社を設立し，1833年から1835年にかけて自然科学と人文・社会科学の啓蒙書シリーズ“Chambers's Information for the People”を出版した．これは，一般人向けの大項目百科事典で約100項目の分冊よりなり，各項目ごと16頁の小冊子体で刊行された．1842年の第2版からは，各巻約50項目，約800頁にまとめた2巻本も出版されるようになった．本邦に舶載された同書第4版（1857年版）は，箕作麟祥を中心とする文部省編輯寮の洋学者たちにより『百科全書』の書名で各項目が訳出され，1丁20字詰20行の整版本で板行された．“No. 20 chemistry applied to the arts”は明治6年7月，牧山耕平訳「百工応用化学篇」，“No. 90 education”は同年10月に箕作麟祥訳「教導説」，“No. 49 medicine-surgery”は，明治7年2月に坪井為春訳「医学篇」として出版された．この「医学篇」は巻之上31丁，巻之下41丁で，巻之下には「百科全書篇名」として「通計九十二篇，二百冊」と刊行予定の和訳本の書名一覧を記載しているが，序文や凡例は編綴されていない．

谷津三雄先生は，『医歯薬史雑録』（1992年，医歯薬出版）の中で，「本書（百科全書医学篇）は坪井為春訳と記されているが訳本（原本）は不明である」と述べ，その記述内容の一部を紹介している．しかし石井研堂の『増補改訂明治事物起原』（昭和19年）「百科全書の賃訳」の項には，その由来について「其時分（箕作麟祥）先生が頭となつて，フルベツキの持つて居たチヤンブルの百科全書―インフヲルメーシヨンオフピープルとかいふもの百科ばかりあるのであれを割訳しようと……，賃訳に出しました」との関係者の談話を引用している．当初は分冊で発行されていた『百科全書』は明治9年頃から活版印刷となり，それらを合冊した「合本20冊本」が有隣堂から，明治17年には，丸善商社から2段組活版印刷の「百科全書3巻本」が刊行された．本書の先行研究としては，福鎌達夫氏が『明治初期百科全書の研究』（1968年，風間書房）の中で，国立国会図書館所蔵の“Chambers's Informationn for the People第4版”を基に，『百科全書』各篇の構成や訳者，校訂者について詳細に考察している．2005年には原本第5版（1874，75年版）復刻版がユーリカ・プレス社から刊行されたが，松永俊男氏は解題の中で，原本第2版～第5版の構成の異同，記述内容の変遷について科学史家の立場から言及している．訳者である坪井為春の事績と家系に関しては，泉彪之助先生が本学会誌上で詳しく講究されている．

演者が架蔵するChambersの原本第4版は133 × 213ミリの版面の中に2段組76行で活字が組まれており，“No. 8 animal physiology-the human body”は，田代基徳が「動物及人身生理」，“No. 75 phrenology”は長谷川泰が「骨相学」の書名で訳出した．小林義直や柴田承桂なども各篇の訳者として名を列ねているが，明治前期に西欧科学をどのように受容したかを研究する上でも原本と和訳本は貴重な資料であろう．

邦訳『百科全書』の目録に従えば，「医学篇」の巻之上では，総論，内科，医薬功用，薬剤製法，巻之下は，外科，失血，湯火傷，関節創傷，毒物，眼病，耳病，鼻，口中歯牙及ヒ歯齦，溺死，不潔ノ大気に逢フテ窒息ス，縊死，咽息，皮膚，麻剤で構成され，主に応急的な処置や家庭での注意事項などを述べている．原本の“Anaesthesia”の項では，麻酔法の歴史やエーテル，クロロフォルムについて115行の記述があり，坪井為春は「麻剤」との項目名でほぼ原文通り訳している．しかし，最後の10行に記載されている“Mesmerism”については全く訳しておらず，メスメルの動物磁気説はこの時期には未だ日本に紹介されていなかったと思われる．